
紙屋敷

面映ゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙屋敷

【Nコード】

N7329S

【作者名】

面映ゆい

【あらすじ】

昔市松一重かずしげという男があった。

なに不自由のない生活を送っていた。

少しばかり落ち着きかわないが、役職、素行良し。

どこにでもいるような平凡な外見。

しかし彼には伴侶がいなかった。

皆が皆このことを不思議がった。

それは何故なのか？

紙屋敷とは…！？

第一話（前書き）

初投稿がんばります

第一話

昔あるところに、市松^{かずしげ}一重という男があった。

この時代にはあまりない裕福な家に育ち、武芸をたしなみ、いい役職につき、なに不自由のない生活を送っていた。

一重は飯を食べるのは遅いが仕事は早い。

「一重は飯を食べるのが遅いのう、飯を食べるのが早い男こそ、仕事が早くできるのじゃ」

前に上役に言われて、一生懸命早く飯を食べるようにしたのだが、数日でもとどろり。

まあ昔からの習慣を変えるのは大変難しく、そう容易くできるものではないということだ。

身長は普通かそれより低い。

眉は少し濃くて目は奥二重。鼻は低いが、団子ではない。少し薄い唇。まして年寄りということでもない。

しかし彼には伴侶がいなかった。

そういう話はないでもない。少しばかり落ち着きがないが、役職、素行良し。

どこにでもいるような平凡な外見。皆が皆このことを不思議がった。

第一話（後書き）

次はもう少し長くします

第二話（前書き）

第二話です。

第二話

つい先日上役の娘との話が持ち掛けられてそれに応じたが、結局相手が結婚を拒否したのだった。

「おい！一重！貴様、折角かわいいかわいい儂の娘との話を持ち掛けたというに、断るとは何様のつもりじゃ！」

朝から頭ごなしに怒鳴られた。

「平助様：申し訳ありません。しかし平助様、わたくしは娘さんに断られたのでございます」

（おいおい…話を持ち掛けてきたときは「躰のなっていないに至らないじゃじゃ馬娘じゃが、一度話をしてみんか」みたいなこと言ってただろ！）

一重はその音量の大きさに耳を塞ぎながら心中で文句を言った。

そして、どうやら平助の大声は部屋中に響き渡ったらしく、稽古中の者 コツソリ聞いていた者がざわざわと溢れてきた。

「断られたって一重さん、何かしたんですか？」

「キツイー一言を言っちゃったとか？」

「ぬ、そうなのか一重！」

「違います違います！…話を聞いてくださいよ」

「じゃあ、じゃあ、なんだというのじゃ！」

「あ、某も気になるのでござる。なぜ市松殿が毎回縁談をなしにして来るのか」

「毎回つて……じゃあ皆さんにはもう、将来の伴侶。いるんですか？」

「あ、いますいます」

「いますよ、もう」

「俺こんな弁当用意できませんよ」

幸せな三人以外皆目を泳がせた。（ほら、みんなこんなもんなんだろ）

「でも、俺たちより絶対市松さんのほうが機会ありますって」

「そうそう。ちよっと背は低いですけど」

「人当たりいいですし」

「だから、皆気になってるんですよ！毎回市松さんが断られるの！」

「そうですよ！」

「僕も気になるのう、市松…話せ」

「…、…。わかりましたよ。多分…ですけど、心当たりはありますよ」

「へえ！」

「なんだろ」

「なんなのじゃ」

床を一瞬見つめ、残念そうに一重は口を開いた。

第二話（後書き）

ひっばります

第三話（前書き）

三話です

第三話

「私の字が…うまいからです」

「……」

みな一様に、

あー…。なるほど。という様な顔をしていた。

書き物を綺麗に書くと言うのは女のたしなみだ。

飯が多少不味くても字の綺麗な女のほうがより良い。目をつぶってやれる。

…。そんな事柄なのに、自分の旦那となる人のほうが字が上手いなんて

もし結婚して相手のほうが剣術が上手かったら絶対に嫌だ。結婚したくない。

大体が自己紹介の時に紙に名前を書いた時。

話が上手く運びそうで文書に自分の名前を書いた時。

仕事の書類を見せてみてと言われたとき。

私にはできないから計算をしてみと言われたとき。

一重の字を見るやいなや女達は青ざめ遠ざかって行くのだ。悲しいかな、まともに恋もできぬ。

「一重、すまなかつた。許せ…。お前より字の上手いおなごが現れることを祈っておるよ…」

「そうですね、一重さん。きっと字が綺麗な人…沢山いますよ。書を教えている師でさえ妻がいるんです。大丈夫大丈夫」

「なんなら字が綺麗な俺の女房に聞いてみましようか？」

「お前は黙ってる！羨ましいんだよ！あれだろ、和子さんだろ！」

「えっ、和子さんて、あそこの川の近くに住んでる！？え、結婚してたの！？お前の家…って川の近くじゃねーよな、どうやって知り合った！いつ結婚した！」

「半年前だ」

なにやら雑談が混じってきた。

「みなさん、ありがとうございます。嬉しいです」
そういう一重は少ししょぼりしていた。

そんな時に一人が何かを思い付いたらしく、こぶしで手のひらを叩いた。

例のあの動作である。

「あ…！、なあ一重よ。こんなのはどうだろう？」

「なんだ？」

皆がこの時代では珍しい長身の男に注目した。名を小林良伸よしのぶと言う。さつき話していた、和子を半年前に妻に迎えた男だ。

「左手で字を書けばいいんじゃないか！」

おおー！

皆の歓声上がる。

背の高い上に気転が聞くとは、なんと要領のよい男か。

うんうんと頷く者、良伸の肩を叩く者。その中で浮いているのは、一重その人であった。

本当は一番にその手があったかと言はずの一重が、だんまりなので良伸は言った。

「一重、左手じゃあ、駄目なのか？」

「ああ、そうなんだ」

至極残念そうに一重は言った。

「なんでじゃ？まさかお前汚すぎて逆に嫌だとかそんなことを言い出すのではないのか？」

「平助様違いますよ、私は、…左手でも右手でも同じように字が書けるのでございます」

「お前、…それなら、こんな仕事止めて…書の塾でも開いたらどうなんじゃ」

皆からの視線が生温かった。

第四話（前書き）

第四話です。今回は良伸と和子だけがでてきます。

第四話

？良伸は縁側で胡座をかき、月を見ていた。

「良伸さん」

障子が開いて、一人の女が出てきた。真っ白な肌、赤く瑞々しい唇、髪は烏の濡れ羽色の美しい女だった。

「ああ、和子…お酒か、ありがとうね」

「ええ、そろそろ飲みたくなる頃合いかと思いましたが」

良伸は御猪口を持ち、和子は徳利を持って注いだ。

宴でワイワイ飲む酒も美味いが、こうして静かに月を見ながら愛する女に注がれた酒は格別だった。

「今日、仕事場で一重の結婚のことで相談に乗っていたんだ」

「そうなんですか、一重さんですから、お相手はいらっしやるんでしょう？」

「いんや、なんでも縁談はあるらしいが、結局断られてしまっらしい」

「どうしてまた…」

「字が、字が…な。すごくきれいなんだよ」

「あら、そうなの」

「多分、お前よりも…」

「そんなに？」

「そつだ、今日試しに見せてもらったが吃驚したぞ」

あの後、どれほど綺麗な字を書くのかと、下っ端に筆と紙を持ってこさせ、書かせた。

筆が生き物のように滑らかに紙の上を滑り、その字は今まで見たどんな字より奇麗だった。

「ふふ、あたしも見てみたいわ…あと、あなたの字が、あたしより汚くてよかったわ」

「やっぱりそういうものなのかい？」

「そういうものなのよ…あ、でも」

「ん？」

「2つ離れた家の西織朋音さん、今結婚したいそうよ、それにあの人は字の綺麗な男ひとが好きなの」

「へえ、珍しいこともあるもんだ」

「だけど、自分より綺麗でもそれでもいいかどうかはわからないわ。今度会ったら聞いてきてあげる」

「ありがとう、助かる」

「トントン拍子に進んだら、何かお礼を貰いたいわ」

「わかった、さあもうそろそろ寝ようか」

「…はい」

今度は良伸が注ぐ番だ。

月明かりに和子の肌の白さがよく映えた。

第四話（後書き）

気軽にコメントいただけると幸いです。

第五話（前書き）

一重がお見合いします。

第五話

「一重！」

職場の廊下を歩いていると、呼び止められた。

「なんだ良伸か、怒鳴り方が平助さんそっくりで吃驚したよ」

「まあ、似せたからな」

「…お前」

「いい話がある、お前にとって…な」

「…縁談か？すまないが私は、もうあまり期待しないようにしている」

「いや、今までが駄目でも今回は期待してくれ！なんてったって相手は字の綺麗な男をご希望だよ」

「ほ、本当か！！」

2人は良伸の家に向かった。

「和子今、帰ったぞ」

「あ…お邪魔します」

「よくいらしてくれました、どうぞご寛ろぎください…お帰りなさい…あ、でも寛げませんか、朋音さん先にいらしてますわよ」

良伸の家で2人は顔を合わせる事となった。

襖を持つ手が震える。…この部屋に生涯の伴侶になるかもしれない女ひとがいるのか…。

一重はいつもどうせ断られるからと気合いも入れずに応じていたが、今回は違うのだ。字のどこで断られることはない、しかしそれ以外で何か失態をおかせば断られるのだ。

久々に緊張する…。気を引き締めなければ。

襖を…開けた。

「あ、あの。こんにちは…」

「こんにちは」

さつき玄関で会った良伸の妻ほど美人ではないが、愛らしい女であ

った。

普通より大分茶が強い髪、少し下がりがみの眉、瞳は一重だが丸くて黒目がはつきりしていた。小さな鼻に、小さな口。ぷっくりと膨らむ頬。顔は少し丸かった。

「…あ、あの、その、お待たせしてすみません」

「いえ、今、来たところですよ」

「…そうでしたか」

今、来たというにはあり得ない量の茶菓子の包み紙が散乱していた。せめて屑籠に捨てるべきではないだろうか。

口の端に茶菓子を付けた彼女は今までの女とは違うのだ。そう、直感で思った。

「あなた、字がとてもお上手だそうですね」

「はい、まあ…」

「書いてみてくださる?」

「え?」

「はい、この紙に…ささ。どうぞ」

「…はい」

断られたらどうしようと思いつつながら筆を持ち、包み紙に文字を書く。

「わあ…本当に綺麗…素敵ね」

「…はい?ど、どうも」

いつも、信じられないというような嫌な顔しかされてこなかった一重にこれは新鮮だった。

「あたくしの父が申しておりました…字がきれいな人は、心もきれいな人だと」

「…朋音さん」

「…」

2人は良伸と和子が襖の隙間から様子を窺っていることに気づきながらも、寄り添い合った。

第五話（後書き）

やっと朋音登場した…。

第六話（前書き）

わりと時間の経過が早いです

第六話

暫くというよりは短い時間がたって、2人は一緒になることになり、朋音は初めて、自分の花嫁道具を置く場所を決めるのも兼ねて、一重の屋敷を訪れた。

家まで来るのに大分たった（なぜだかなか一重は朋音を家に入れたがらなかった。柔らかくなにかと拒否していた）。会うのはいつも朋音の家であった。朋音の家は立派ではない小さな家だったのでこちらも家に入れたがらなかった。

2人は部屋の奥へ奥へと歩く。
なんの変哲もない、ただ少しばかりいい役人な一重の家は立派だった。お屋敷だった。

家に入れたがらないものだから、あんまりいい家は想像しなかったし、部屋が汚いことも予想した。どれもこれも違ったようだが…。
だんだん奥の部屋に近づく、一重の自室はどこだろうか。

「朋音」

「はい、なんですか」

「君が後悔しないようにもう一度だけ聞くけど、私でいいのかい？」

「今更。あなたしかいませんよ」

「そうかい。じゃあ私は、言わなくちゃならない」

「何をです？」

「秘密を」

「ひみつ？」

朋音は首を傾げた。

「この屋敷に来た人はこの屋敷をこつ言うのさ…紙屋敷」

「かみやしき？」

「あと…もう一つ」

「はい」

ちよつと突き当たり、あとはこの部屋しかない。一重の自室である

う部屋はここだ。なぜならその他の部屋は自室というにも書斎とい
うにもあまりに物が少な過ぎだ。

それよりもかみやしきとはなんだろう。

一重が襖を開けたと同時に言う。

部屋の中を見た。

「私は、君に一つ嘘をついている」

朋音はその部屋に、一重の一言に、二度目を見開いた。

第六話（後書き）

次回、一重の衝撃の事実

第七話（前書き）

七話じち。

第七話

「…っ！」

朋音は驚いた。

紙が積んである。

天井まで積み上げられた紙の束が部屋を敷き詰めている。

一応、ここが自室だから辛うじて歩いて進める道のようなものがある。けれど他は全部紙だ。紙の束だ。

視界を塗装以外の白が覆う。

どうやってこの状態にしたのか

なんでこんなに紙を積み上げたのか

この大量の紙はどう手に入れたのか

何に使うための紙なのか

言いたいことは山ほどあるが…。

「…ひっ、い……あっ……っ」

気持ち悪い

これは、…これは異常だ。

自分の理解できる容量を完全に越えている。朋音はへなへなと床に崩れた。

落ち着きのないところ

恥ずかしがりなところ

見かけによらず力持ちなところ

平凡そうに見えて実はボンボンなところ

茶菓子やご飯をきれいに食べるところ

笑うとちよつとかわいいところ

字が、きれいなところ

初めて会ったときより確実に一重を好きになった自信があった。今でも好きなところは好きだ。

でもこれはちょっとおかしいだろう。

どこか病んでいて病気なのだろうか？

「ごめんね、本当にごめんね、こんな思いさせてごめんね」

一重は辛そうな顔で朋音に言う。

「……………」

「結婚はなしにしよう、いいんだ、私が悪い。君は何一つ悪くなんてないんだよ」

「……………」

朋音は落ち着こうと深呼吸をしている、目に涙を溜めながら。

「さあ、出ていきなさい。出ていきなさい。なるべく早く。この事を誰にも言うなとか、そんなことは言わない。出ておいき。さ、早く。他の皆のように…」

「……………」

朋音は立ち上がった。

「…さ、お行き」

立ち上がって、また座った。

「……………」

「…！」

座った朋音を見て驚く。嗚呼、期待したら駄目だ。きつと腰が抜けたんだ、そうに決まってる。

「……………はあ」

朋音の深呼吸の音が聞こえた。

「なんなら家までおぶっていくよ？」

一重は朋音の目線の高さでしゃがみこんだ。

そうしたら、朋音に顔を両手で包まれた。

「…どうして？…今日は一重さんの家に泊まる約束じゃなかったかしら？」

朋音は強気な目で口は弧を描いた。

「…君は」

「秘密、教えてくれてありがとうございます。自室くらいなんとかすればあたくしを入れないようにするくらいできたでしょうに…あたくしのこと信用してくださいましたのね」

「朋音…」

「あたくしはこれくらいのこと嫌になっただけじゃありませんわ…」

「…朋音、君は」

「あたくしは、あなたの妻なのですから、他の皆とは違いますのよ？」

一重は微笑んだ朋音を見つめることしかできなかった。

第七話（後書き）

タイトルのまんま…

第八話（前書き）

数時間後です

第八話

半日が経ち、二人床についた。

あの部屋以外は別段特徴のない大きなお屋敷だ。

だからあの部屋から出たあと、さっきのは白昼夢か何かだったので
はと思つたが、あの後泣き出してしまった一重の赤くなつた瞳があ
れは現実だつたということをお話つていた。

着流しを着た一重は寝返りをうつたので向き合つ形となる。

「君は本当に物好きだね」

「…物好きがないと誰も誰とも結ばれませんわ…貴方だつて」

「私を好きな君に比べたら…君を好きな私は正常だよ」

現時点では特にね、と付け足した。

「あなたの部屋がどうしてあんな風なのか教えてくださる？」

「まだ、言いたくないや…誰にも言ったことが…いや、言おう。聞
いたら私から逃げてはくれないか？」

「最初はあるに盛り上がったたではないですか、どうして今頃突
き放すようなことを言うの？」

おかしな方。

朋音は笑う。

「最初、初めて良伸の家で私が女の人のそれより綺麗に書いたこと
を君が喜んでくれたからだ。あんなの初めてで。君しか居ないつて
…私は思つたんだけど君を知るうちにどんだん君の良いところがあ
つてね…、それで、私は君しかいないけど君にはもつといい人が、
君に相応しい人がいるんじゃないかと思つてね、だから私はこれか
ら何もかも話して君に嫌われようと思つてね」

「それである部屋を見せたんですか、貴方私が残つても泣いていま
したから、もし私が出て行ったらいつまで泣いているんでしょうね」
朋音は暗闇だからわからないと思ひ呆れた顔になつた後、ニヤリと
笑つたようだった。

「…うるさいな、だいたい女は泣き止むのが早すぎるんだ」

「そうかしら？女は泣く必要がないと思ったら泣くのを止めてしま
うのですよ…あらあら、布団に潜らないでくださいよ。部屋のこと、
あなたの話が聞きたいのです」

「ただで教えたくない」

「…ふむ」

朋音は一重側の布団をめくった。

「…？…、…」

「……………」

ちゅっ。一重の口を吸った。

「さあ、話してくださいよ。多分あなたの話じゃ割に合わないでし
ょうから、明日お茶菓子を買ってきてくださる？」

この家には紙じゃなくてお茶菓子が必要だわ

朋音は言った。

「…わかった、それもわかった」

一重の顔はこの暗闇でもはっきりわかるくらい真っ赤だった。

第八話（後書き）

次もがんばって投稿します。

第九話（前書き）

一重が話します。

第九話

「まず私が話しておきたいのは、私の紙に対する異常な執着だ」
布団の中で一重は言う。

「執着……」

「紙っていうものは消耗品だろう？筆で物を書けば違う紙を使わなければならんからね」

「消耗品」

「私は小さい頃からね、物を紙に書くのが好きだった。絵でも、落書きでも、文字でもいい。毎月母は私とその兄弟に紙を与えてくれた……私は、その与えられた紙を使いきる、それがどうにも……快感だね」

「……」

「そんな生活を暫く続けて、『一重は紙をすぐに使ってしまうね』なんて母に言われたもんだ。話は少し変わるけれど私の姉はとても字の綺麗な人だったんだ……」

一重は一呼吸置く。

「姉さんばかり褒められるのがたまらなく悔しかった。私はその頃から、字を練習し始めたんだ……」

「練習……ですか」

「私は、字が綺麗になるように努力をした」

「人並みに綺麗になったさ、でも私は鍛練を怠らなかった」

「なぜ、左も同じようにしたのです？」

「字のうまく書けない左手が自分の中で許せなかった……からかな」

「そう……ですか……」

「？……そして、事件は起きた……事件って程じゃないけどね」

朋音と目が合った。

「そんな生活を続けて、ある年に森で火事が起きて……紙の材料にな

る樹が何十本も燃えてしまったんだ、当然紙の値段が上がり、あまり紙を使わないようにして、母からもらう紙なんてほんの少いで、すぐなくなってしまうた。そこで困ったことになった」

「…?」

「私は、紙を使いすぎるのが好きだった、紙が私の机の引き出しから無くなるのが…だけど、紙がなくなつてむしる清々しいはずなのに、私は、自分の引き出しに紙がなくなると不安で仕方なくなつた」

「不安?」

「紙を使いきりたい私と、消耗品である紙が無くなることを恐れる私。矛盾しているがその2つが私の中で生まれた…それが、あの部屋だよ」

「……」

「…あの紙の束、私が書いたもの、落書きをしたもの、そして残り
は…」

これから使うための紙だ。

私は、自分の部屋から紙がなくなるととても不安になる。仕事場で落ち着きがないのはその為なんだよ。いつ誰が私の紙を奪うかと思うとハラハラしてね…朋音、この屋敷には物が少ないと思わないかい?」

「思います」

「それは、私が紙以外に価値を見いだせなくなつてしまったからだ…給料も半分は新しい紙を買うためのもの。必要最低限の食料を買い、そしてあとは貯金だ。その貯金だつていつかまた紙を買うため、私の仕事が無くなつても紙を書き続けることができるようにする為なんだ」

「…、異常ですね」

「君は見かけによらずハツキリ物を言うよね…傷ついちゃうな」

一重の苦笑いは朋音の声にかき消された。

「一重さん、それじゃあ書道でも教える先生になられては?あなたは人並み以上…人並み異常に字が上手いですし、書道の先生なら、

紙をどれだけでもついでいようと何もおかしくありませんわ、…天職じゃなくって？」

「それは私も考えたさ…でも駄目だ」

「どうして？」

「生徒の紙を奪いたくなつて仕舞うだろ？」

「…まあ、呆れた」

呆れたと言つわりには態度はたいして呆れていないようだった。

一重は朋音を引き寄せ小さな唇を味わった。

「…朋音」

「一重さん…」

朋音の言う通り、女は泣く必要がないと思つたら泣くのを止めてしまつ生き物らしい。

一重は腕の中にいる朋音を見て苦笑した。

第九話（後書き）

次回は短いです。

第十話（前書き）

短いです。

第十話

朝二人で朝食を食べる。

「一重さん、花嫁道具は西側の二番目の部屋に置いてもいいかしら」

「ああ。好きにするといいよ」

「一重さん、約束覚えてまして？」

「ああ、茶菓子だろう。仕事帰りに買ってくる」

「いつてらっしゃいます」

「うん、…あ、朋音」

「はい」

「朝飯…美味かった。私は、濃い味付けが大好きなんだ」

「あら、あたくしも。奇遇ですこと」

一重は職場に向かった。後ろから手を振る朋音。

結婚生活…そんなに夢見てはいなかったが、自分には一生縁のないことだとおもっていた。しかしそれが現に起きている。もう二十年以上紙のみに囚われた一重に、神は案外優しいのかも知れない。

(多分無理だとは思いますが、私の心は全て朋音に向けばいいと思う。そうしたら、幸せになれると思う。)

二十年余りという歳月は一重にはあまりに長く、心を縛るには充分に長い時間。

あんなものを見ても離れない朋音に救われた自分はそれでも朋音より紙のほうが大切だなんて…口が裂けても…。

ああまた泣きそうだ。朋音と過ごすようになってからだ、こんなのは。

一重は足の下の土を踏みしめた。

第十話（後書き）

濃い味つけは美味しいです。

第十一話（前書き）

一重の一人語りです。

第十一話

私は、紙に心を取られてしまった。

この世の紙を使いきたい私と

この世の紙を全て自分のものにした私

矛盾しているようで一つにまとまってしまった、…その結果があの部屋だ。

どうしてもっと早く自分は己のおかしさに気づけなかったのか。

ここまですると虚しさや滑稽さ、そんなものまで出てくる。

苦しい、誰か私を救ってくれないだろうか。

壁に掛けてある暦も紙。

重要な書物も紙。

仕事の書類も紙。

そこの隅で今月の予定を書いている男も紙を使っている…。

襖や障子も紙なのだ。

ああ、奪い取りたい。

全てに何か書きたい。

それが全部私のあの部屋にしまいたい。

私のものになりたい。

でもそれを実行しないのも、それをもし実行したとしたら、仕事が無くなって紙を手に入れることはできなくなる。

結局、紙なのだ。

…苦しい。

「…、…」

朋音。

私は君に愛想つかされなくて済むだろうか。

他人ではなく妻となってくれた朋音が、耐えられなくなって私から離れると思うと怖い。

でも一番怖いのは私の家にいる朋音が私の紙をどうかしてしまったらどうしようかと考える自分だった。
そんな風にしか考えられない自分が心底嫌になった。

第十一話（後書き）

次回もがんばります

第十二話（前書き）

一重、仕事場にて。

第十二話

遠くから声がすると思ったら自分の名前を呼ばれていた。

「…しげさん！…一重さん！…一重さんてば！ちよつと！」

「…なんだい？」

「ちよつとどうしたんですか？そんなにはーっとして！一重さんが珍しい」

「伊吉奴アだめだぜ」

「あ。良伸さん、おはようございます。どうしてです？」

「一重は恋患いなのさ」

「恋わずらい？」

「奥さんと蜜月なんだ、俺たちの言葉なんて届かねーよ」

「それ、結婚したての良伸さんでしょ！一重さんはそんなことありませんよねー！」

「あ？うん。そうだなあ」

「ほらっ！一重さんは真面目だから平気です」

「一重…嘘つくなよー」

「いや、さすがに言葉が届かないとかはあり得ん」

「…そうか？」

「私はお前ほど惚気たりしない」

「…、そうか」

「一重さん、どんな相手なんですか！結婚おめでとうございます」

「…シート、平助様の娘の縁談断った後にすぐ結婚はまずいだろっ。暫く黙っていてくれないか？そして音量を下げてくれ」

「ああ、そうでした。すいません」

「うん」

「で、どんな方なんですか？」

「…、…。どちらかという和小さい、肌色は普通。顔はなかなか可愛らしい顔をしている。…見かけによらずズバズバものを言っ

りと毒舌で傷つく。あと物の食いが汚い。茶菓子を一度に大量に食べる」

「…、食べ方汚いって…。一重さんどこが良かったんです？顔ですか？」

「食べ方は汚いがなんか雰囲気だけ上品だから、あんまり気にならないよ。飯が美味いんだ。あと包容力…がある」

「ふーん、見てみたいなあ」

「…やらんよ」

「わかってますって！やっぱり一重さんもおかしくなってる！」

「伊吉、お前も今にわかる。結婚したらそりや浮かれるのもあるが、いろいろ大変過ぎて、やっと契った時にや、頭のネジを布団に三本くらい落としてきちまうのさ。男なんて皆そんなもんだよ」

「私はネジを落としてきたりしない」

「もうあんたら黙ってる」

ドタドタとうるさい足音が聞こえる。

「ええい！一重、良伸、伊吉！貴様ら儂がさつきから何度も呼んでんでおつたの聞こえておらんじゃろ！」

「…すみませんでした」「」

「さつきから何の話をしておる！」

ま、まずい…一重さんの結婚の話なんてしたら平助様確実にキレる…と、伊吉は思った。

「あ、…えーと、ですな」

「頭のネジの話です」「」

息びったりな二人だった。

第十二話（後書き）

読んで下さっている方、ありがとうございます。

第十二話（前書き）

十二話の続きです

第十三話

結局三人とも平助に竹刀で頭を叩かれ、廊下に正座させられた。

「いたたた…おれ、悪くないですよ…これ」

「悪い悪い。一重じゃないが、俺の女房に会わせてやるから元気だしな、茶でも飲みこい」

「えー…やですよ、良伸さんの奥さん自慢するんでしょ」

「まあそれもある」

「確かに、良伸の奥さんは美人だったな…」

「一重さん見たんですか!」

「ああ…見たよ」

「…ほら伊吉、お前にも紹介しときたいんだ、来い」

「一重さんもどうですか?」

「…今日はいい」

「野暮だねえ、伊吉。かわいい妻が家で待ってるんだ帰らない奴がいるわけない」

「…、…」

「あは、そうですね」

「なあ、こちら辺に美味しい和菓子屋、無いか?」

「なんでまた?」

「お前和菓子とかあんまり食わないだろ…あ、奥さんか! たーくさーん買ってつてやりな」

「…ああ」

「おれ、知ってますよ! 川沿いにある和菓子屋なんか美味しいんじゃないですかね。ここから真っ直ぐです」

「そうかい、ありがとう」

「じゃ、一重は和菓子屋行きたいみたいだし、そろそろ足も痺れてきたことだし、そろそろ帰ろうか」

「そうですね」

「うん」

平助もきつと正座のことを忘れていたろう、三人は職場を出た。

第十三話（後書き）

次は朋音が動き出します。

第十四話（前書き）

動き出すってほどのもんじゃないですね。

第十四話

朋音はあの部屋の前に来ていた。鍵は掛かっていない、しかし入っ
ていいとは一度も言われてなかった。それでも、入らなくてはなら
ぬ。自分は一重の妻なのだ。家族なのだ。なのにも関わらずこの壁
をなくすには、この紙をこの部屋からなくすか自分が…

あの光景に慣れること。あの部屋を二人の壁じゃなく、する。

このままだと、きつと朋音の反応はいつまでも一重を傷つけ、それ
を理解した朋音もまた傷つく。その繰り返しだ。

なんと悲しい堂々巡りなのだろう。

（だから…あたくしが慣れればいい、だってあれが、一重さんにと
って正常なのだから…）

でも、だけど…あの紙の量はあり得ない

あんなに高く紙が積んであるわけない

あんなにも、歩きづらいほど敷き詰める理由は

あの人にとって正常ってなに？

（夢、夢だ。おかしな夢を見ていたのだ。）

勇気を出して扉を開いた。

（だって、あんまりにも非現実的…）

…な現実がそこにあつた。それは、重くのし掛かってきた。がつく
りと只頂垂れた。

「……………」

事実だと頭でわかっていても、どこかでは夢だったのではない
かと思っていた。

でも…

やっぱり夢じゃなかった。昨日彼の涙を袖で拭いていたのを今さら
ながら鮮明に思い出して齒噛みした。

一歩一歩前へでる。

（勝手に触ったら、怒られるのかしら？）

天井まで積んでいる紙は朋音の背丈では見ることが叶わない。天井まであるのだ、誰か覗きこめる人がいるなら出てきてほしい。もうそれは、天井まで届くさながら白い柱だ。

ある一ヶ所はまだ積んでいる途中らしく、一つは朋音の膝の辺り、もう一つは踝、更にもう一つは腰の高さまで積んであった。

手にとってまじまじと見る。

ある紙は落書き

ある紙は絵画

ある紙は文字が書いてあった。

もう柱のようにそびえ立っていて見えないけれどこの白い柱のうちどれかが落書きを書いた紙の柱であり、または絵を描いた紙の柱であり、あるいは文字を書いた紙の柱だろう。

一重はまだ若いと思う、なのにこの紙の量は…おぞましい。

そしてその日に書く分の紙を入れてあると話に聞いた引き出しがあった。自分の花嫁道具より、立派なものだった。

「…、…」

朋音は小さく深刻な顔でため息をつき、部屋を出ていった。

一度外に出てまた部屋をまわってまたあの部屋に戻りもう一度引き出しを開けて閉めた。

一重が帰ってくる頃なので晩ご飯の下ごしらえをした。

「…ああ、疲れた。あの部屋、無駄に疲れるわ…字、やっぱり綺麗ですわ…あたくしのなんかよりもずうっと…あたくしもちよっと字、練習しようかしら」

「

ただいまが玄関から聞こえた。

第十四話（後書き）

一重の屋敷はすごく広いです。彼はわけあって一人で屋敷に住んでいます。その理由は後程。

第十五話（前書き）

十五話です。

第十五話

「おかえりなさい、ちょっと言っていた時間より遅いんじゃない？」

「すまないね、君に頼まれた和菓子、どれが美味しいのか悩んでいたのさ」

「…昨日の今日で、本当に買いに行かれたのですか？…嬉しいですわ」

「約束したからね、さ晚饭にしよう」

「あたくしお茶にしたいわ」

「駄目、それは晚饭を食べてからだ」

「あ、晩酌は？」

「しない」

「そう？お酒は好まないのかしら？」

「ああ…下戸じゃあないけど」

「そう…」

「君は好きなのかな？」

「いいえ…、ねえ」

「なんだい？」

「見るだけならいいでしょう？和菓子…」

「見たいならみるといい」

一重は魚の骨を取りながら朋音の様子を見て、それ以外のことに對しても苦笑いをした。確信した。

部屋に入ったな。

朋音は病弱に見えるが、体は丈夫なのだそうだ。その朋音はあんなに青ざめている。大方、慣れようとして部屋に這入ったのだろう。後で部屋に行ってみよう。まあ確認するまでもないだろうけれど。

…そして今日の分の紙に書かなくてはならぬ。

もう一度朋音を見ると山盛りの飯を箸でつつき、ぼろぼろ溢しながら晩飯を食らっていた。

今までみた女：いや自分と食事をした人間の中で、一番すさまじい。しかし一番行儀がよさそうに見えるから不思議だ。箸の持ち方は正しいのにどうしてあんなにぼろぼろこぼれていくのだろう。

「…今日は食べるのいつもより早く早くないか？」

「そうですね？あたくしはもともと早食いですわ？」

「まあそうだけれど」

朋音ははにかんで言った。

「あなたがあたくしに買ってきてくれた和菓子を早く食べたくて仕方ないのです」

第十五話（後書き）

食い意地はってます。

第十六話（前書き）

20話完結予定です。

第十六話

朋音が茶菓子を食べている間、「風呂に入ってくる」と言い、服を取りに行くフリをして自室に寄った。

昨日となんら代わりのないようで少し違う。

紙の重なり具合が大分違う。

一重はいつものように引き出しを開いた。

「……?!」

一重は部屋を出た。

風呂に入る。

湯船に浸かり、思った。

もしかしたら朋音と生活をすれば、自分のこの厄介な癖を直すことができるかもしれない。

一重は書きたくて書きたくて仕方ない衝動を押さえた。

いつまでもつだろうか。

そして、本当にやめることができるだろうか。

いや、できる。

現に自分はいま風呂に入っているではないか。

墨で身体が汚れてはいけないのでその日の分を書いてから湯に浸かるのが一重の習慣だ。

しかし今日はそれをしていない。

昨日も書いたのだ。

客間で朋音を落ち着かせている間に。

嬉しくて仕方ない。

もしやめることができた自分は今よりは、朋音を喜ばせるなにかができるようになるだろうか。

引き出しの中には、今日使う分の紙の上には…。

栗の味の茶菓子と
梅の花びららしきものが入っていた。

夜がきた。暫く満月が続く。

煌々とまではいわないが、ぼんやり薄く冬の夜を照らしている。
朋音と一緒に床に入る。

一重も朋音もどちらかという点小柄なので窮屈ではない。

たとえ窮屈だとしても余裕があったとしても、抱き合っているのだから大差はない。

ぱち

火鉢から音がした。

その音と話し声だけ。やけに部屋に響いた。

「なあ、聞きたいんだけど」

「な、なんでしよう？」

引き出しのことを問われると思っているのか朋音は伝わるか伝わらないかくらいのギリギリなところででも微かに動揺を見せた。

ここで聞くような真似はしない。自分は気持ちをくんでやれる男だ。
「君はどうしてそんなに食べるのが早いんだい？見かけによらずたくさん食べるようだし」

「…やだ、恥ずかしい。知りたいの？」

「恥ずかしい、とは言うが朋音は少しも恥ずかしくない。」

「知りたい」

「楽しい話なんかじゃないわ。…あたくしの実家は貧しくて貧しくて、父は遠くの地方を守りに行ってしまっただし母は病気だったし…」
母はここ数年で泣くなり、父からの連絡は途絶えてほぼ天涯孤独になっってしまった朋音は自力でなんとか生計を立てていた。

弱そうに見えてのこの強さの理由はここであり、身体は小さくつく

りが華奢なのは幼いころから十分な食事をしてこなかったから。

「だから、こんなに美味しいご飯が食べられて幸せで、家も雨漏りしないし、こんなに広い…あたくしあなたの家を見たとき驚いたんですのよ?」

「中に入ってもつとびつくりしただろう」

「ええ、まあ…でも本当にこの布団もふかかだし、あたくしは与えられてばかりですね」

「そんなことはないさ、現に今も君の抱き心地を楽しんでいる、なかなかいいよ」

「…そう」

この女は基本的に照れる、ということとはしないようである。

「そういえば、どうしてあなたはこの家に一人で住んでいるのかしら?」

「あの部屋を見ただろう、絶縁されたんだよ」

「絶縁」

饑別代わりに市松家の莫大な財産を何割かもらいそしてこの家を与えられた。

もう関わらないでくれ、と。

家はそれぞれいろいろな形をもっているが、家族でも拒絶された癖を受け入れた朋音の度量は計り知れない。

家族も他の皆の内に入っているのか入っていないのか。

最初に部屋で話したときの一重の苦しそうな顔が朋音の脳裏に浮かんだ。

そして一重を少し責めてしまった。

家族に言われても一重はやめることができなかつたということか。

「曾祖父にそっくりだと言われたよ」

「その人も紙を?」

「いいや、その人は…ほら市松模様つてあるだろ、私と同じ姓の柄だよ」

「ああ、ありますわね」

「それは、柄の名前は私の家の姓から来ているんだ」

「へえ、知りませんでしたわ」

「曾祖父も若いころからその模様が好きらしくてね…最初はお気に入りの袴の柄だったんだけど…そのうち袴も着物もすべて市松模様。布団も火鉢も障子も襖も畳も廊下も壁も床も厠も玄関も履き物も箆笥もほかのものも全部市松模様だ」

「ぜ、全部…」

それは一重以上ではないか。いや、でも第三者から見たら二人とも異様だ。

気持ち悪い。

例えば、一ヶ月後にこの屋敷のもの全て市松模様だったら、屋敷中紙の柱だらけだとしたら…果たして自分は一重の側にいれるだろうか。

一重の妻である自分は。

家族でもいところで親戚でも親友でも友達でも恩師でもない自分は…。

朋音が悶々としている中、一重も悶々としていた。

朋音を抱き締めているその手の爪に、墨がついていた。

（結局、我慢出来ずに今日も書いてしまった。朋音と生活するようになって書くことに罪悪感が生まれるようになった私は、それに耐えることができるだろうか…）

申し訳ない気持ちで埋め尽されて自分から朋音を手離す日が来るだろうか。

朋音が自分の全てを受け入れてくれたとしても。

自分が傷つきたくないから、朋音から言い出してほしいなんて思う自分は最低で、でもやっぱり手離したくなくて、自分の腕の中でもう寝てしまったその人を起こさない程度に抱きしめた。

「…御免ね」

第十六話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

第十七話（前書き）

そろそろラストに向かいます

第十七話

朝、一重を送り出す。手を振る。

まだ数日足らずなのに昔からこうだったみたいなのがして不思議でならない。

「はあ……」

朋音はあの部屋へと足を進める。入ると相も変わらずのその部屋の存在感の異常さに目眩がした。

筆と紙（一重の使用済み）に字を書く。

「はああ……」

がつくりと項垂れ、その紙を低い柱の真ん中辺りに入れる。

まさか順番があることもないだろう。

そう、朋音は物凄く字が下手なのだ。

（字の綺麗な人は、心の綺麗な人……じゃあ、字の汚いあたくしの心は……）

どんなに練習しても字のきれいにならなかった朋音を父親は責めた。

「朋音！どうしてそんなに字が下手なんだ！母さんはあんなに綺麗に書いているんだぞ。字が綺麗な人はな、心も綺麗なんだ！だから女はちゃんと字を書けなきゃならんだ！」

「……ごめんなさい」

「あらあら貴方、いいのよ。朋音は朋音の字のよさが有るの。それとも、貴方はどうなのですか？」

「ぬう……」

朗らかに笑う母は、確かに心の綺麗な人であった。

「……………」

朋音はぼんやりと部屋を見渡す。さすがにここまで練習はしていないが、自分も少しくらいましな字にならないものか。

一重が自分がいることによって癖を直すことのできない自分に罪悪感を感じ始めていることに、朋音は気づいていた。

一重は寝ているだろうと思っていたようだがあるとき朋音は起きていたのだ。

「御免ね」という彼の腕は微かだが震えていた。

朋音が一重と暮らして気づいたことは、一重がなかなか繊細で弱いということだ。

脆弱さ。

一見芯の強そうな動じなさそうな雰囲気の中で、微かにそれが見え隠れする。

…そういうところも、好きなのだけだ。

「…ていつ」

ある一本と行っても過言ではないくらいの紙の柱を蹴ってみた。

柱はびくともしなかつた。

「……………」

紙なんてあるからお互いにつらい思いをするのではないか。

そんな考えが浮かぶようになった。

朋音は拒絶以外の答えを出して、それに慣れようとして、現在は一重の字の上手さではなく、その練習量を目にして過去を振り返り悩み一重は自分を受け入れてくれた朋音に答えることができず、紙に執着することで朋音を苦しめ、朋音ではなく紙を大事に思う自分に絶

望し、毎日の習慣に罪悪感を感じながら過ごしている。

あるいは朋音が字を練習していることを知っているのかも知れない。

字の綺麗な男の側にある字の汚い女

一重の苦しみは絶えず、このままでは…。

(あたくしは…間違っただことをしたのかしら)

引き出しに入れた茶菓子

否定しなかったあの部屋

求婚を受け入れたこと

そして、朋音は思った。

ああ、紙がすべてなくなればいいのに。

第十七話（後書き）

字をきれいに書くのは難しいです。

第十八話（前書き）

十八話です

第十八話

一重は仕事場に向かう。

空は快晴。真冬なので空気が乾燥している。この時代に除湿機は無いが。

一重は気づいていた。

朋音が人知れず字の練習をしていることを。

口には出さなかった。怖かった。何かが崩れてしまいかもしれないと思っただし、まだ始まって間もない結婚生活の中で…最近僅かに音がする。

きしきしと

軋むような

亀裂が入るような

何かが、ひび割れるような

そんな音が聞こえる。

大きくは聞こえない。

だって、表面では二人は、譲り合って思いやって連れ添って、笑い合っているから。なんの問題もない。

しかし、二人が戸惑い、焦り、壁を感じた時にはその音が確かに聞こえて、ぎうと心の臓に近い場所を締め付けるのだ。

一重は歩きながら茶菓子を食べた。行儀が悪いが、今しかない。

怖くて怖くて、とても朋音の前では口にできない。

食べた後の紙屑を見られるのも同じように。

（私はなんと臆病なのだろう。朋音はあんなに美味しそうに食べているのに…）

自分の顔がくしゃりと歪んでいることに気づいた。

こんな顔ではみっともないので少し時間をかけて向かった。

「お早う」

「おう一重遅かったな！」

「ほんと、どうしたんですか？」

「伊吉は鈍いなあ。奥さんに呼び止められたんだろ。『あら、もうこんな時間？そんなに早く行かないで！私と仕事どっちが大事なの！』」

「朋音はそんなこと言わない」

あの女は実際かなりドライだ。そんなこと言うもんか。

「実は、言われたの俺でした…」

「ふーん」

「くっ、羨ましい…」

そうか、伊吉は昨日良伸の家に行ったんだったか。

「一重さん、この人最悪なんですよ、昨日家にお邪魔したところまではないんですけどもう顔見知りだし、おれは美人なの知っちゃったし…朝から惚気惚気惚気！」

「…ああ。大変だったな。わかるよ」

つい先月までその役は一重だった。

昼にはまた茶菓子を食べ、良伸に冷やかされ、考え事が尽きなかったためいつもよりも早く仕事が終わった気がした（職場に来るのも遅かったが）。

自分の屋敷が見えてきた。

大きな屋敷。立派な屋敷。絶縁されたときに貰い受けた屋敷。思い出の詰まった昔からの屋敷。

私の紙が

私の全てがある
紙屋敷。

黒い煙を上げて燃えていた。

思考が止まった。

止まったと思ったが、思い出す。

「なあ、一重」

「なんだい、良伸」

「やっぱりさ奥さんがいる暮らしは良いだろう」

「…ああ」

「なんかさ、暖かくならないか、家庭って言うヤツ？」

「…そうだな」

「お前家族いないみたいだけど他の人間が家にいるってどうなんだ？」

「…なんでそんなこと聞くんのだ？」

「お前、最近…幸せそうだからさ」

「オーラって言うのか？」

「嫁さんもらつとさ、もう…いろいろ大変だしぶつかるとしんどいこととかいっぱいあるけどさ…」

「うん」

「一番大切にしたくなるよなっ」

「…うん。そうだね」

キツパリと即答できた自分に驚き、安心して…。

それを今、実行できるのか？

「…、…朋音」

どうしよう、怖くて、動けない。

石像みたいに。

もし朋音ではなく紙をとってしまったら…一生立ち直れない。

しかし、うるたえている間にも朋音は…。

足がすくむ。

視界の端に、梅の花が見えた。

朋音はこの梅の花びらを引き出しの中に…。

石像に変えられた王さまが魔法で元に戻るように。

一重の身体は動き、走り出した。

第十八話（後書き）

いよいよクライマックスです。

第十九話（前書き）

朋音サイドです。

第十九話

女の苦しそうな声ばかりが聞こえる。

「…っはーっはーっ…、…はっ…、ごほっえほっ…っ…っ」
朋音は廊下に這いつくばっていた。

煙があとからあとからでてきて、朋音の顔を微かに汚した。

「…、…なんで」
朦朧とする意識の中で、なんとか這って進む。

画鋲かなにか鋭利な物が落ちていたようで、左腕からは血が流れていた。

「…はっ…はあっ…苦し…」

朋音は着物で口を覆う…が、それでは前に進めない。

仕方なく再び両腕を床に這わせる。

屋敷は全て一階であり、現代のように階段はないので避難は難しく
ない。

しかし彼女は今、この広い廊下を這い、出火原因と思しき部屋に向
かっている。

これはもう自殺行為である。

消防士ではないが、その辺りのようなことを生業としている者たち
はまだ来ていない。

運の悪いことに、同時刻に田舎ではなく、都市で大規模な火災が起
きてしまい、皆そちらの消火をしていたのだった。

しかも職場の誰も一重の家が判らないことからわかるように、ここ
は人の集まる集落から大分離れたところにあり、燃えていても「ど
こか知らないけど誰かの家が燃えている」くらいの認識なので誰も
消しにこない。

もし今から向かう者がいても間に合わない。だから皆動かないのだ。
ある一人を除けば。

「ど…して…」

ドン

彼女は両腕で床を思い切り叩く。ただ痛いだけだった。

(あたくしも無駄なことをするのね)

叩いても前には進まないの、這う。

少しずつでも、前に。

天気がよかったので、朋音は外で洗濯をしていた。

焦げた匂いがして空を見ると屋敷が燃えていた。

「…っ！」

急いで屋敷に入るも、もう煙がすごくて前が見えない。

立っていると、喉も肺もやられるので這って進む、もちろんあの部屋へと。

(一重さんの大切なものが…でも、どうして…あたくしの所為なの?)

「痛っ」

床を見ると何か光っていて右腕からも赤い水がこぼれた。

「…、…はっ…はっ」

喉に異常が現れ出した。

「…ん」

いつの間にか気を失っていたようだ。

奇跡的に目が覚めたようだ。

…覚めたくなかった。

あと数メートル先に炎がまるで業火のようにメラメラ揺れている。

もうあの部屋は全焼してしまったんだろう。あの紙も…全てが燃えたのだろう。

(あたくしは馬鹿ね、例え部屋に辿り着けてもあたくしになにができるって…)

そして、この屋敷もいずれは。

もう、身体は動かなかった。

「…えほっ…げほっ…げほっ」

口から黒いたんが出た。

もう、目を開ける気力もない。

(嗚呼、迎えが来るのだろうか…。まだ年寄りではないのに…。)

(一重さん、ありがとう、ごめんなさい、ごめんなさい、愛していただきます、あたくしは先に…)

第十九話（後書き）

次回最終話です。

最終話（前書き）

最終話です。

最終話

遠くから一重の声が聞こえた。

「…ね！…朋音！大丈夫か！？」

「……………」

熱い、すぐそこに迫っている赤と灼熱。

なぜ一重が急いで来れたのかというと、火事の熱風で扉などが吹き飛び煙がさらに上に運ばれる為だ。

正直今でもつらい…

それ以上な朋音は…。

這って進んだのと、この屋敷が広いからとで現在地は入り口から3分の1程度。

その3分の2はもう今にも燃え尽きそうだが。

一重は朋音の口についた黒いたんを袖で拭ってやり抱えあげた。

そして壊れかけの壁を渾身の力で蹴り、脱出した。

「朋音！朋音！朋音！」

「…一重さん」

朋音が目を覚ました。

顔色が悪い。

朋音は井戸に水を汲みに行ったりしていたため、屋敷の火事がどれくらい前から起きていたのか知らなかったのだが、朋音が火事を知ったのと一重が朋音を救った時間差はあまりなかったことや、朋音が姿勢を低くしていたため、命を落とすことはなかった。

それでも、当分咳やだるさ、息苦しさや黒いたん、といった症状は続くのだが。

「一重さん、ごめんなさい」

朋音は一重に抱かれながら消えそつな声で言う。

「……」

「あたくしが、悪いの」

「君が火をつけたの？」

「いいえ……でも願いました」

「……」

「あんな部屋なくなってしまえばいいと。火事にでもなればいいと願いました……」

「それは君の所為じゃない」

「でも……たしかに……ごほっ……願いましたよ」

「……」

「嫌いに……なつてください、こんな……っはあはあ……あたくし」

「それは、無理だ」

「あたくし、自分が綺麗な字を書けないから。一重さんに……嫉妬したの」

あたくしの字は汚いから。

「字の汚い……えほっ……人の心はどう……はっ……なんでしょ……っ……ね」

字の綺麗な人は心の綺麗な人だから。

「朋音……君は馬鹿だね」

一重は咳き込み出した彼女の涙を拭った。

「……」

「字が綺麗かが心が綺麗かどうかということではないよ……」

そんな風に信じて君は馬鹿だね。私はそんなことはないよ、幼い頃でも知っていたよ？

一重は笑った。

そして、あやすように朋音の頭を撫でた。

「でも、紙のことしか頭にない私はもつと馬鹿だ。そんな私のことを好きでいてくれる君は心の綺麗な、優しい人だよ」

「……」
「屋敷が、私の紙屋敷がなくなつて、心が軽くなつたんだ。本当は癖なんかじゃなくて、私の思い込み。強迫観念だったのかも知れないね、いつそ清々しくらいだよ」

「でも……大丈夫なの……紙が……はっ……無くて」
「紙よりも大切な……君がいるからね。もつともつと早く気づけば私のこの20年以上は無駄にならなかつたのかもね」

「……無駄なんかじゃ……ありませんわ……今の一重さんが……っ……いるから……あたくしは……出会い……恋に……落ちたのです」

「いまだうまく酸素が吸えないのか、朋音は絶え絶えだ。消えてしまひそうで、怖い。」

「……私もだ」

一重は朋音を優しく抱きしめてなんとも言えない顔で笑つた。
煙に病んだ彼女は、治るとしても代償には大きすぎる。

「朋音」

「……はい」

「ここより職場に近いところで空き家があるんだ……こんなに広くないし、普通よりとても小さな家だけれど……。紙を失つた私は……きつと不安定で今よりもつと気苦労が増えるだろうけれど……それでも君は「あなたと……暮らしたい」

肉体的にも精神的にも気丈な彼女の答えは即答。こんなになつてしまつても、まっすぐな黒目に心を動かされた。

「……うん」

「あたくし……楽しみです」

「私もだ」

燃え盛る焔に屋敷が全て燃え尽きる前に、二人は誓い、互いに涙を拭い合い、笑つた。

二人は約束通りその空き家に住んだ。

紙屋敷とどうしても比べてしまったため、本当に小さな小さな家だった。

仕事場から近く、良伸や伊吉も遊びにくるようになった。

一重は今、朋音の書道の先生をしている。

今日も手に墨を付けながら無邪気に笑う彼女が見れるだろうか。

そんなことを考えて早く顔が見たくなって、家までの道を足早に歩いた。

（私は幸せだよ…）

右手には和菓子屋の袋が揺れていた。

おわり

最終話（後書き）

完結することができました。ここまでお付き合いくださった方、ありがとうございます。

次に投稿する小説を書きたいと思うので、暫く投稿はできませんが、6月頃からまた投稿を始めたいと思っております。

タイトルは home sick（予定）です。よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7329s/>

紙屋敷

2011年5月10日20時01分発行